

瀬田唐橋

せたのからはし

瀬田唐橋は古代から畿内防衛の最前線にあった。この橋が歴史上に登場するのは壬申の乱（646年）のときである。天智天皇亡き後、近江朝廷に反旗をひるがえした大海人皇子の軍は美濃で態勢を立て直し、攻めのぼって来た。近江方は勢多（瀬田）橋の橋詰に陣を張り、橋の中央の板3丈（約10m）ばかりを取りはずし、弓矢を連ねて敵を待ち受けた。大海人方の勇敢な兵士がよろいを重ね着して、一枚の板を渡って切り込んだところ近江方の陣が乱れ、多くの兵が逃げ出したという。この戦いによって大海人方の勝利が決定的になった。

昭和63年、現在の橋の少し下流の河底から古代の橋の橋脚の基礎と思われる遺構が見つかった。この基礎は杭を打ち込んだものではなく、厚い板を平面的に六角形状に組み合わせたもので、ほぞ穴の上に6本の柱が立てられていたと考えられる。また基礎の配置からスパンが約15m、幅員が7～8mもある大規模な橋であったと推定されている。この遺構からは古代の銀銭なども見つかり、時代的に近江京との関連も指摘され、付近の古代の歴史がより具体的に語られるようになった。

平安時代に入り、東海道、東山道が瀬田を通過するようになると、勢多橋の役割がより重要になっていった。しかし平安時代の文献に、洪水による流失や火災による焼失の記録も多く見られ、橋を渡れないこともしばしばあったようだ。

都の境界にあたる勢多橋にはいくつかの奇譚が伝えられている。橋詰に住む鬼女の話や、橋の下に住む男に湖底の竜宮へ導かれた話などが『今昔物語』や『太平記』にある。

源平の合戦や南北朝の争乱のときに勢多橋が争奪戦の舞台になっている。『平家物語』や『太平記』などの記述から、まさに「勢多橋を制するものは畿内を制する」の感がある。

本格的な橋が作られるには強力な政権が必要である。織田信長は天正3年（1575）、朽木村の山中から材木を取り寄せ、幅員4間の本格的な橋を架けている。江戸時代には幕府が管理する公儀橋であった。初期には膳所藩や畿内の代官に工事の奉行が命じられたが、後には京都町奉行の指揮のもとに技術的な実務は京都御大工頭中井家が行っていた。勢多（瀬田）橋が唐橋と呼ばれるようになるのは近世以降のことらしい。高欄に多くの擬宝珠がつけられるようになってからのことであろう。

瀬田唐橋が初めて鉄の橋になったのは大正13年（1924）6月のことである。5本の鉄筋コンクリート柱の橋脚の上に長さ10.9mのI形の鋼桁が並べられていた。この橋も戦後の交通量の増大と老朽化が進んだために昭和50年から54年にかけて架け替えがおこなわれた。河川条件を守りながらできるだけ木橋のイメージを出すために設計上の配慮がなされている。橋脚を5本の柱によって構成し、旧橋から引き継いだ擬宝珠付きの高欄、桁隠しなどが取り付けられている。

〔MH〕

竣工年月：昭和54年（1979）7月23日

所在地：滋賀県大津市唐橋町-瀬田町

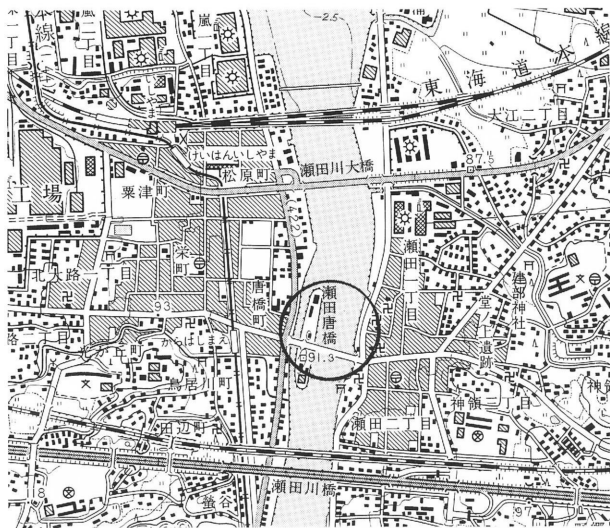
河川名：瀬田川

橋長・幅員：大橋—172.0m×12.0m（車道1×7.0m+歩道2×2.5m）、

小橋—51.75m×12.0m（同左）

径間数・支間長：大橋—1×23.5+5×25.0+1×23.5m、小橋—3×17.25m

形式：単純活荷重合成上路プレートガーダー



(1:25,000 瀬田)



湖底から見つかった古代の基礎と推定される遺構（昭和63年5月）



〈1988年5月，撮影・共に松村 博〉